



Veritas No.33(2006.12.18)

目次 (敬称略)

<<粗雑>は“美しい国”をつくらない>

浜下 昌宏 (図書館長)

<音楽学部創立 100 周年に寄せて>

澤内 崇 (音楽学部長)

西 明美 (音楽学科)

<特集 クリスマスにお薦めの本>

吉田 純子 (英文学科)

溝口 薫 (英文学科)

飯 謙 (総合文化学科)

孟 真理 (総合文化学科)

山 祐嗣 (心理・行動科学科)

三浦 欽也 (心理・行動科学科)

遠藤 知二 (環境・バイオサイエンス学科)

<研究室から>

金沢 謙太郎

<煌きの軌跡をたどる ―― 大澤壽人遺作コレクション ――>

生島 美紀子

<史料室から>

佐伯 裕加恵

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (6) >

松村 昌家

<図書館からのお知らせ>

図書館

無断転載を禁ず

<<粗雑>>は“美しい国”をつくらない>

浜下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

18世紀スコットランドに生まれた思想家ヒュームは、美とは人に自恃(pride)をもたらし、醜とは自卑(humility)をもたらし、と考えました(『人間本性論』2,1,8)。たしかに、フィレンツェのサン・マルコ美術館でフラ・アンジェリコの『受胎告知』を見たときに私を感じたのは、イタリア芸術の凄さとカルネサンスの偉大さということよりも、このような美しい精神を描ききった画家と同類であった喜び、人間としての誇り・自恃でした。人はこれほどに純粋さを内に持ち、それを外に表現できるのだ、という思いは自分を励ましてくれました。(いじめを苦しんで自殺する子供たちには、むろん言葉で命の大切さや親や教師に相談するよう説くことも大事ですがそれ以上に、こうした絵を見せることで、生き続けることの喜びを体験させるべきと思われます。)今日、私は自卑の念に苛まれてなりません、その理由は醜いものに囲まれているからでしょう。

中世ヨーロッパを席捲したペスト、当時黒死病と呼ばれてひとびとを恐怖に陥れた悪魔を描いて、犠牲者が町を踊って歩くさまを描いた『死の舞踏』と題する作品が多く残っていますが、今巷を闊歩しているのは<<粗雑>>という醜い妖怪ではないでしょうか。

旧友の彫刻家が個展を開くというので横浜まで出かけました。(近くで見ることのできる彼の作品の一つは、新神戸の布引ハーブ園のロープウェイ終点を降りた所にあるモニュメンタルなオブジェです。)空間を構成していくように素材やモチーフを組み合わせていく作品については、以前は「君の創ったのはわからないなあ」とぼやくと「同業者にしかわからないんだよ」という答えだったのですが、近年の作品には独特の叙情性が感じられ、私なりに共感していました。今回の作品もパーツとなるたくさんのステンレス・スチールを叩いてひねり、それらを順次溶接して積み上げて幅3.5メートル、高さ2メートル、長さ16メートルほどの大きな鍛造作品です。制作の際にカギとなる溶接技術なども、今の職人で出来る人はわずかになり、失われていく技術の一つのようです。(彼とは“職人から失われ造形作家が受け継いでいる手仕事の技術”について共著を出そうという構想があるのですが。)そのパーツを根気良くひとつずつ作っていくのがまず最初の作業のようでした。「助手や学生の方にでも頼まないの?」「いや、自分でやる。その作業の過程で次の制作の構想も生れてくることがあるので」、が彼の答え。やがて現代芸術の話になり、最近注目の中国の現代美術の感想を聞くと、「声が大きいね」、と言う。「技術や作品ではなく、コンセプトや主張や意味づけが前面に出すぎている」。そして私が言葉を継ぐ、「芸術に限らず、どの分野でも声ばかりが大きく基礎技術もなくプロセスも論理も乱暴で粗雑なものが増えてきたね」。

じっさい、アメリカのイラク戦争の国連決議抜きでの開始決定にしても、大量破壊兵器という、けっきょくはありもしなかった兵器の存在を言いがかりにして仕掛けられたものであり、また日本政府や政権政党のやり方や政策（たとえば「教育基本法」改定やら郵政民営化法案に反対した旧党員の復党問題やら）も、あまりに場当たりの・ご都合主義的に思えます。中江兆民に言わせれば、それは「腕力社会」特有の「その場かぎりの乱暴な方策をもち出して、目さきだけを切りぬけようとする」（『三酔人経綸問答』）にすぎない、志も理想もない御仁の手法でしかありません。

粗雑な発想と思考は政治の世界の専売特許としても、それが私たちの周辺にも蔓延してきているのが何とも忍び難いところです。「まさに今日、この騒然と荒れ狂う無定見な状況は、学問の世界にも発生し、ともすれば憂慮すべき事態を呈しております」（新田義弘『媒体性の現象学』）。なぜこんな世の中に？ 「我勝ちに頭を出そうとする落ち着きのない風潮」（中江兆民、同上）、「今は算勘利口の者の世」となり、「利発」、「才覚」で世を渡る風潮（戸田茂睡『紫の一本』）だからでしょうか。げにおそろしきは教養なき人々の徒党、粗雑な精神と粗雑な感性。“そこのけ、そこのけ、＜粗雑＞がとおる”・・・。

お隣の大学に哲学教師として赴任されたドイツ人のLさんと会いました（彼にはドイツ語の原書から邦訳された『ハイデガーと和辻哲郎』（新書館、2006）という卓越した著作があります）。いわく「日本は洋学を取り入れて150年も経っているのになぜまだ思想が発信できないのか、なぜまだ幼稚な言説がまかり通っているのか？」彼と本屋で待ち合わせたのが悪かったのでしょうか・・・。彼は「実にinfantileだ」と吐き捨てるように言うので、「それを日本語では“ガキ”と言うのです」と教えてあげました。

10年余前、エディンバラに留学していた際、私は日本の美の特性を認識しえたときにやっと母国への共感を抱きましたが、それは＜繊細さ＞という特性でした。＜粗雑＞はいわゆるグローバル化ゆえの副産物なのか、あるいは動物化して劣化が進む知性の問題なのか。いずれにしても日本に美は急速に失われていくようです。それを“美しい国”だなんて・・・。さて、ヒューム論じるように、美は快、醜は不快、そして美は我々の誇り（pride）であり、醜は己を惨めな気分（humility）にするのですから、気持を入れ替えていましてばらく中庭へ出て、岡田山の季節感を楽しむことにいたしましょう。

<音楽学部創立 100 周年に寄せて>

音楽学部「100 周年」及び大澤壽人氏資料について

澤内 崇 音楽学部長 音楽学科教授

本年 2006 年は、音楽学部が開設されて 100 周年となる記念すべき年です。記念事業も「舞踊専攻新設」、作曲専攻から「ミュージック・クリエイション専攻」への改組、「記念講演会」、「各種コンサート」、「記念式」等、数多く行なわれました。この号が出る頃には「第九」による最後の記念演奏会も無事終えていることでしょう。あとは「音楽学部 100 年史」の完成が待たれるのみです。

さて、図書館に関係することとして是非お知らせしたいことがあります。それは、本学に在職していた作曲家「大澤壽人」氏の遺稿、遺品の整理に関してです。大澤壽人氏の作品は、最近色々なところで取り上げられ再評価ブームの観があります。そのような中、今年学院はご遺族から多くの資料の寄贈を受けました。自筆楽譜や演奏会資料、書簡等多岐にわたるものです。音楽学部では、これらの貴重な資料を「大澤壽人遺作コレクション」として後世に残していきたいと考えています。そのために 現在、図書館と音楽学部を中心に委員会が設けられ、本学の作曲専攻卒業生で、非常勤講師でもある生島美紀子氏を中心に整理を始めました。何年かかるか判りませんが、ある程度まとまった時点で公開していきたいと思っています。皆様どうか楽しみにしててください。

音楽学科 100年と共に歩んできた音楽図書室

西 明美 音楽学科教授

今年音楽学科は100周年を迎えました。各所で色々な催しを開催しておりますので皆様すでにご存知のことと思います。

10月には音楽図書室から見た100周年と銘うちまして本館図書室において古い楽譜や音楽学科に関係された作曲の先生方の（ほんの一部の先生方なのですが）直筆楽譜、昔のプログラム、トニックソルファ（音符を記号で表記する）等を、飾らせていただきました。又JD館でも史料室が懐かしい写真を飾ってくださっております。本館のほうは既に終了致しましたがJD館のほうは今年一杯展示しておりますので、まだご覧いただいていない方は是非お立ち寄り頂けたらと思います。

私は今年度の図書委員の立場から音楽図書室の中を色々見せていただきました。長い間音楽図書室に居られました田中恵美子さんがきっちり全体を把握なされておりましたので今回の展示に必要な資料を色々探していただきました。

かなり古い音楽関係の書物、例えばグローヴ（音楽辞書）の初版かな？と思えるもの、でも残念ながら全四冊の中の一冊が抜けております。

その他大正、昭和初期や戦前、戦後直ぐのものなど、その時代を象徴する紙質や印刷など興味深い楽譜も多々在りました。

外国からいらっしゃった先生方の貴重な楽譜、音楽書等も寄贈されておりました。当時はご自分で重たい楽譜や音楽の理論本などを直接持って来られた事と思われます。

今の時代の様になんでも直ぐに手に入れる事など出来ない時代でしたから、その貴重さは現在とはかなり違うものと想像出来ますが、それらのものを女学院にと思ってくださることが本当に有難いことと思いました。

岡田山移転当時音楽図書室は今の40教室にありました。現在もその当時のままの本棚のケースが片側一面に残って居ります。

この部屋で先人の方々が熱心に和やかに勉強して居られたのだと想像することが出来ます事が嬉しいですね。

現在の音楽図書室はその当時から比べますと何倍もの規模になりました。私たちの学生時代にはなかったCD,MD,DVD,などを聞く設備も設置されておりますし、楽譜は手書きでは無く今はコピーです。

これ等などからも想像できない時代がどんどん過ぎて行くと思いますが、古く懐かしいものがそこかしこに溢れているこの学び舎を大切に受け継がせてゆかなければ成りませんね。

<特集 クリスマスにお薦めの本>

吉田 純子 英文学科教授

リンダ・スー・パーク著 『木槿(むくげ)の咲く庭』 (新潮社 2006年) [When My Name Was Keoko by Linda Sue Park, Dell, 2002.]

最近の日本では、韓国ドラマがブームになり、韓国への新たな関心が高まっています。本書は、韓国系アメリカ人二世によって書かれたヤングアダルト向けの本です。作者パークは、『モギ、ちいさな焼きもの師』(あすなろ書房、2003) [A Single Shard 2001]によって、アメリカ児童文学の最高の賞であるニューベリー賞を2002年に授与された、今、もっとも注目されている作家の一人です。本書を英語でもぜひお読みください。

この小説は、歴史家ブルース・カミングが韓国にとっての「失われた時代」と呼ぶ1935年から1945年の10年間のうち、1940年から1945年までの間に、大邱(テグ)郊外の町に住む朝鮮人一家の生活を、兄妹二人の語りをとおして描いています。1940年の「創氏改名」で主人公のキム・スンヒは金山清子となり、その兄のキム・テヨルは金山信男となります。彼らがその後、戦争、終戦、国家の独立を経て、ふたたび本名を回復する1945年でこの物語は終わっています。

校庭で友だちが勤労挺身隊にリクルートされていくのを目撃する主人公の少女。神風特攻隊に志願して日本国内でその訓練を受ける主人公の少年。植民地支配をする日本政府への抵抗運動のため、姿を消す叔父。激動の時代に分裂の危機に瀕した家族を、寡黙に必死で支える家長の父親(アボジ)。この一家の母親(オモニ)は、日本政府の政策により、民族の象徴である木槿の花を切り倒して代わりに桜を植林するように強制されても、監視の目を逃れて、こっそり木槿の苗木を庭の片隅で守ります。また、友好的な日本人生徒との微妙な人間関係も描かれています。

本書は、フィクションですが、この間の歴史的事実に基づいて書かれており、若者向けの小説としては異例なことに、巻末に23冊の参考文献が列記されています。

一番近い民族でありながら、さまざまな意味で情報を遮断されてきたこの民族の歴史を、その一端でも、本書を通じて知っていただければと思います。

クリスマスが、色とりどりに飾られたツリー、カードのやり取り、ご馳走、プレゼント、ゲームで楽しまれる、今日見るような楽しい家庭の行事となったのは、19世紀も半ばのことである。そうした風潮を作ったプロパガンディストの一人が、子どもからは「クリスマスのおじさん」として親しまれたイギリスの文豪、ディケンズであったというのは有名な話である。クリスマスごとにキリストの生誕節を祝う物語を書き、雑誌を通して多くの人々と喜びと楽しみを共有することを自身の願いとも使命とも考えていたこの作家に、まずは季節の敬意を表して、最初の推薦書は彼の『クリスマス・キャロル』（新潮文庫など、初版は1843年）としよう。

この物語は、意地悪でけちな金貸し老人スクルージが、クリスマスの精霊に導かれて過去、現在、未来の世界へと旅するなかで、やがて恵み深い心優しいおじいさんへと回心してゆくというおとぎ話風小説である。が、そう思ってページを開くと、書き出しからびっくりさせられるかもしれない。というのは、まず、マーレイなるスクルージの共同経営者が「確かに死んでいる、その死んでいる状態たるや、絶対で、イギリスの慣用語にもあるとおり棺桶釘のごとく確実——」と、一行ですむはずの一人の男の死亡の報告がくどいほどに行を重ねて繰り返されるからである。短気な読者ならここで放り出しかねないが、こうした凝った出だしは、実は、19世紀の金融界の真っ只中、寸刻を惜しんで金儲けにいそんでいるスクルージ、そして同様の経済社会に生きている忙しい読者を、摩訶不思議なできごとの起こる幻想の世界に誘うための、小さな仕掛けの一つなのである。事実、数ページもすれば、読者は、いつの間にかロンドンの夜寒の空のもと孤独なスクルージに寄り添いつつ彼の回りに起こる出来事を眺め始め、ついには、彼とともに泣き笑い、つまりは、自らの感情を十分豊かに引き出してくれる物語の世界にすっかり入り込んでいることに気がつくことになる。今年のクリスマスの一時を心豊かに過ごしたい人にお薦めである。

ところでクリスマスが子供たちにとってこの上もなく楽しい家庭行事となってきたことを示す証拠は『クリスマス・キャロル』以外の当時の作品にいくつも見出すことができる。例えばルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』（角川文庫など、初版は1871年）である。アリスが会おう様々な不思議な昆虫のうちの一つに「スナップ・ドラゴン・フライ」という奇妙なトンボがいる。日本語では火トンボくらいにしか訳せないのだが、このトンボ、体がプラムプディング、羽がヒイラギ、頭が燃えている干しブドウでできており、クリスマスの贈り物の中に巣を作る、とある。要するに子どもがクリスマスに目を輝かせた様々な物が合体した虫なのである。アリスは、この虫を見て、「どうして他の虫が火に飛び込むのかわかったわ、みんなこの頭が燃えている火トンボになりたいのね」とへんな合点をするのであるが、ことほどさように子どもは当時、この燃える干しぶどうが大好きであ

ったようだ。このスナップ・ドラゴンという遊びは、燃えているブランデーの皿から、干しぶどうをつまみ出して火がついたまま食べるというちょっと危険？な遊びである。この遊び自体は実はさかのぼること、シェイクスピアの時代からあったようだ。ただそのころは、もっぱらノンベエのおじさんたちの遊びであつたらしく、18世紀のジョンソン博士もその有名な英語辞書のなかで一項を割いている。19世紀半ばになって家庭のお茶の間での遊び、つまりはこどものクリスマスのゲームになるのだが、燃え上がる青い火の幻想的な雰囲気、ちょっとしたスリル、そしておいしい干しぶどう、となれば、こどもたちがいかに浮き浮き、はらはらしてこの遊びに興じたかは想像に難くない。ところで、意外なことに、この遊びが当時、こどものものであったという事実は、マイケル・ファラデーの『ロウソクの科学』（岩波文庫）にも窺える。

ファラデーは、電磁気や、電気分解、塩素の液化やベンゾールの発見など、数々の科学的偉業を残した高名な19世紀の科学者であるが、この本は、1860年のクリスマスに王立科学院において子どもたちのために行った連続講義を編纂したものである。その第1講で、ファラデーは、ロウソクの炎がどのようにして生じるのかを順を追って説明して、さらに炎の舌の変化が気流によっておこることをわからせるために、子ども達がよく知っているスナップ・ドラゴン遊びを引き合いに出して実演している。どうすれば干しぶどうにもよく火がつくのか準備のコツも説明しながら進める講義は、こどもたちの好奇心を柔軟に満たしながら、それを科学的な説明につなげてゆくというもので、その手際にファラデーの人間としての魅力も感じられて面白い。それとともに、クリスマスに当代一の学者の話を子供たちに聞かせる機会を提供するイギリス社会のありよう、教育についての彼等の考え方についても考えさせられてしまう。理科離れという言葉が叫ばれて久しいが（文学離れも問題なのだが）、日本の(理科)教育再生を考える人のための意外な一冊ともいえるかもしれない。

今回のお薦めは古典ばかりだ。ならば、最後にもう一冊、バリバリの古典を推薦させていただく。クリスマスの真の意味を「主は人の望みの喜び」と捕らえるなら、こんなお薦めもできようものだ。内村鑑三の『余は如何にして基督教信徒となりし乎』（岩波文庫）だ。1896年英米で出版されたとき反響の少なかったこの書物は、やがてドイツや北欧で評価され多くの読者を獲得するに至る。今この書物を読み返してみる価値は測り知れない。単なる観念ではなく、キリスト教を自分にとっての生きる意味として真剣に考えて始めている人にとって、内村の、単に英米人の物まねではなく日本人がキリスト教を学ぶ意味について考える正直な姿勢、さらに、キリスト教による己の精神の変化についての丁寧な観察、そして少しずつキリスト教についての理解を深めてゆくことによって生まれた種々の深くて着実な見解は、大いに参考になるはずだ。そればかりではない、内村の、宗教的なものへの純粋な傾倒、熱心で徹底的で、かつ、決して偏狭でも固陋でもない精神、それは

日本人の再発見につながるかもしれない。またこの書物は、20世紀初頭のヨーロッパの人々の異国日本人に対する理解の現実、さらには、国際的に通用する人間とはどういう存在なのか、という今日においてこそもっとも重要な問いについても、十分考えさせてくれる貴重な一冊である。

飯 謙 総合文化学科教授

O.ヘンリー著 『賢者の贈りもの』（大久保訳『O.ヘンリー傑作集』新潮社、清野訳『オー・ヘンリー短篇集』岩波書店、等に所収）

若い夫婦ジムとデラの物語。クリスマスイブ、二人はそのパートナーにプレゼントを願った。しかしそれを買うお金はない。他方、夫妻にはそれぞれ大切にしてきたものがあった。ジムは祖父の代から引き継いだ金時計。デラは長い髪。二人はそれを売って、贈り物をととのえた。ジムはデラの長い髪のための櫛、デラはジムの金時計にあう鎖。二人は、実生活にはまったく役に立たないかもしれないが、それを超える深い価値を互いに贈りあったのだ。著者のオー・ヘンリー（1862-1910）はこの作品を、聖書の言葉をちりばめながら綴っている。題名にある「賢者」とは、新約聖書冒頭のマタイ福音書2章に登場する「学者たち」から示唆を得た表現。彼らは誕生直後のイエスを、贈り物を携えて訪問したという。このエピソードのゆえに、クリスマスは自身が大切にすることを隣人に贈るという習慣が生まれた、と。そこでオー・ヘンリーのこの物語は、クリスマスの季節に世界中で愛読される作品となった。わが国でも岩波文庫、新潮文庫、講談社など、いくつもの翻訳が出版されている。わたくしごとで申し訳ないが、二、三年ほど前のこと、所蔵する『オー・ヘンリー短編集』がずいぶん古く、汚れてしまったなと思っていたところに、その新刊をある卒業生から（もちろん偶然にも）お送りいただき、驚いたことがあった。いまはそれがわたしの書棚にある。原書はオー・ヘンリーの The Four Million という短編集に所収された。出版は1906年とあるから、今年が記念すべき100周年の年だ。

孟 真理 総合文化学科教授

アーダルベルト・シュティフター著 『水晶』（『水晶、他三篇』（岩波文庫 2001、1993）、『石さまさま(下)』（松籟社 2006）、『シュティフター作品集 3』（松籟社 1984）、『世界の文学 10』（集英社ギャラリー1991)などに所収)

西洋文学に「クリスマス・ストーリー」と呼ばれるささやかなジャンルがあります。もとは新約聖書のイエスの生誕物語を指しましたが、後に、クリスマスを題材にしアドヴェントからクリスマスにかけて好んで読まれる物語もこう呼ばれるようになりました。（ちょっと皮肉なコメントをしておく、クリスマスプレゼントにふさわしい本をという出版社の思惑も絡んで作家に注文が来たりもします。日本では絵本とラブストーリーが定番なのはご存じの通り。）

クリスマスはキリスト教の祝祭のうちもっとも厳粛さと喜びに満ちたものであるばかりでなく、貧富の差を越えてともに祝うために慈善をおこなう日として、また、ふだんは遠く離れた親族が一年に一度集まる機会、いわば家族の祝祭（日本のお正月に似ています）としても、大切にされています。クリスマス・ストーリーは、この晴れやかな日にふさわしい恵みにあふれる、そして時にささやかな教訓を含んだ、特に青少年向けの物語として数多く生み出され、とりわけ「家族の世紀」である 19 世紀に優れた作品が生まれました。日本でもよく知られた例がディケンズ『クリスマス・キャロル』や、ホフマン『くるみ割り人形』（チャイコフスキー作曲のバレエの原作）です。

ここではオーストリアの作家シュティフターの珠玉の短編『水晶』をおすすめしたいと思います。ストーリーは読んでのお楽しみですが、クリスマスの意味、精緻な自然描写、凍てつく冬山をさまよう幼い兄妹のけなげな姿、そして青白い氷河の上に広がる満天の星空と、闇を照らす無数の蠟燭の光が、とても美しく印象深い作品です。

私自身も小学校高学年の頃、クリスマスプレゼントに念願の『少年少女世界文学全集』を買ってもらい、この物語に出会いました。とはいえ大人の読書にも十分たえる名作で、ぜひ読み継がれてほしい作品です。

山 祐嗣 心理・行動科学科教授

「慎重な楽観主義者？」

「環境破壊は、現代文明によるものであって、古代の人々は自然を守って暮らしていた」

「環境破壊の責任の多くは現代企業にある」

「日本が豊かな森林を保っているのは、日本人が自然を愛する民族だからである」

「食糧危機といっても、オーストラリアなどにはまだまだ未開拓の広大な土地がある」

みなさんは、上記の主張にどのような感想をもつでしょうか。おそらく、みなさんの多くが素直に受け入れてしまうほど、これらは「常識」なのではないでしょうか。しかし、J. ダイヤモンドの『文明崩壊』を読むと、これらの「常識」は、かなり疑わしいものであることがわかつてきます。

彼は、前著『銃・病原菌・鉄』において、文明、文化の不均衡・多様性がなぜ生じたかを、「民族の優秀さの差異」などという幻想を用いずに、地勢や気候などを含めた環境条件によって説明しています。彼自身によれば、『銃・病原菌・鉄』で、文明・文化の多様性を環境条件で説明したので、今度は、どのようにして過去の文明が崩壊していったのかを説明して完結したかったようです。

彼のアプローチは、民族の優秀さの差異をほとんど認めないという点で、左翼平等主義者とみなされることもあるようです。とくに、「西洋人は民族的に優秀である」とか、「日本人は自然を愛する民族である」といった偏狭なナショナリズムとは無縁であるといえるでしょう。しかし、一方で、「昔の人々は自然を愛しており、自然破壊は現代文明あるいは現代企業によるものである」とする、左翼平等主義者が崇拜しそうな素朴な信念も喝破しています。この立場は、この素朴な信念を「高貴な野蛮人」思想として批判しているS. ピンカーの考え方と共通しているといえるでしょう。

では、現在の文明は、この先、この状態で持続可能なのでしょうか。これは、読者一人一人が考えていく問題だと思います。なお、J. ダイヤモンド自身は、自分を、悲観主義者というよりは「慎重な楽観主義者」であるとして締めくくっています。

蛇足ですが、わたし自身、現在、認知と文化についての研究を行っており、以前、『銃・病原菌・鉄』を読んだときに、将来ぜひこのような著作や論文を書きたいものだと思っていました。最近、人間の認知から文化的多様性に言及した論文(タイトル' A dual process model for cultural differences in thought')が、Mind and Society というヨーロッパ

の学術雑誌に掲載が内定しました。この論文の中のわたしの主張は、かなり J. ダイヤモンドの考え方に影響されています。

J. ダイヤモンド著 『文明崩壊(上)(下)』(草思社 2005)

J. ダイヤモンド著 『銃・病原菌・鉄(上)(下)』(草思社 2000)

S. ピンカー著 『人間の本性を考える(上)(中)(下)』(HNK ブックス 2004)

三浦 欽也 心理・行動科学科助教授

まずはクリスマスらしい本から。

J.R.R. トールキン著 『ファーザー・クリスマス サンタ・クロースからの手紙』 (評論社 2006)

『指輪物語 (The Lord of the Rings) 』で有名な J.R.R. Tolkien が、Father Christmas になりすまして、自分の 4 人の子供宛に書き送った手紙と絵 (イラストと呼ぶ方が適切かも) をまとめた本です。手紙は Father Christmas の近況などを綴ったもので、助手の北極グマやその他の北極の住人が登場する、ちょっとしたエピソードが語られています。Tolkien の子煩悩らしい一面を垣間見せる、ほのぼのとした楽しい文章で、文字や言語に対する学術的な趣味も織り込まれており、本人も楽しみながら書いていることがうかがわれます。

Tolkien が意外に味のある絵を描くことは、知らない人も多いかもしれませんが、この本には手紙に添えられた数多くの水彩画も掲載されており、それがまた、この本の味わいを深めていると言えるでしょう。

また、1920 年から 1943 年という長い期間にわたって書かれており、その時代 (世界大恐慌を経て第 2 次世界大戦の最中まで) の Tolkien の考えや家族の様子なども垣間見られて、それもまた興味深いところです。

元々は 1976 年に英国で出版された “Letters from Father Christmas” の日本語訳です。その 1976 年には、すでに日本語訳の絵本版『サンタ・クロースからの手紙』が出版されていますが、今年出たこの本は、絵本版では掲載されなかった手紙や図版を追加して、より原形に近いものになっています。

腕に覚えのある方は、原書で読まれるのも良いかと思います。子供向けの文章ですから、

基本的には分かりやすい英文ですし、絵もありますから理解の助けになるでしょう。駄洒落のたぐいなどは、原語でなければかえって分かりにくい部分もあります。ただ、口語的な表現や、わざとスペルを間違えて書いている部分もあります（北極グマは英語を練習中？）ので、一概に易しいとも言い切れないかもしれません。

クリスマスは、キリスト教の宗教音楽に触れる良い機会でもあります。バロック音楽の巨匠であるバッハは、「クリスマス・オラトリオ」「マタイ受難曲」「ミサ曲口短調」など、優れた宗教曲を（そして優れた世俗曲も）数多く残しています。バッハの音楽は、堅苦しいとか小難しいという印象を持っている人も多いかもしれませんが、もっと多くの人に聴かれても良い音楽だと、個人的には思っています。

磯山 雅著 『J・S・バッハ』（講談社現代新書 1990）

この本は、人間としてのバッハとその音楽に対する、親しみやすい解説書になっていると思います。バッハの（そしてその時代の）音楽について詳しく知ること、また、バッハの信仰や生活について知ること、で、バッハの音楽が、今までと違った響きに聞こえてくるかもしれません。

また、「聖俗を越える視点」の章で描かれる、信仰をその基盤としながら「人間を超越するものとしての音楽」に対峙するバッハの姿勢は、私のような信仰を持たない人間にとっても、日々追い求めているもの（仕事や研究など）への心の持ち方として、学ぶべきところがあるように思います。

バッハをあまり知らない人や食わず嫌いの人も、是非一度読んで、そして聴いてみてください。

最後は、クリスマスとは関係ありませんが、教育基本法や日本国憲法の改正が取り沙汰されている「今」、是非読んで欲しい本を挙げておきます。大きな文字で 200 ページに満たない本ですから、すぐに読めます。是非読んでみてください。

アンヌ・モレリ著 『戦争プロパガンダ 10 の法則』（草思社 2002）

多くを語る必要はないでしょう。プロパガンダに踊らされて後で後悔しないように、このくらいの知識は持っておきましょう。これから社会に出て行く、そして次の世代を生み育てていく皆さんに、是非読んで欲しいと思います。

遠藤 知二 環境・バイオサイエンス学科教授

アンドリュー・パーカー著 『眼の誕生—カンブリア紀大進化の謎を解く』（草思社）

ビッグバンから30万年後、温度の低下とともに、電子の動きが静まって光がまっすぐ進めるようになった。宇宙の「晴れ上がり」である。だが、まだ誰も晴れ上がった宇宙など見るものはいなかった。生物が誕生していなかったからである。地球ができてだいぶ経ってから、カンブリア紀の大爆発と言われるめざましい生物の進化が起きるよりも少し前、生物の住んでいる海中に、それまでより多くの光が届くようになった。地上に立ち込めていた深い霧が晴れたのかもしれないし、銀河系の塵の立ち込めた渦巻きから地球がたまたま抜けだしたのかもしれない。理由はよくわからないが、ともあれ地球の「晴れ上がり」が起きた（らしい）。だが、まだ誰も晴れ上がった地球を見るものはいなかった。生物は誕生していたが、眼が誕生していなかったからである。その後しばらくして、本書の著者の言う「光スイッチ」が入った。つまり光の量が増えたせいで、眼が誕生したのだ。（最初に眼をもった生きものには、世界はどんなふうに見えただろう？外部世界と内部の世界イメージはどうやって対応がついていったのだろうか？次々に疑問が湧いてくる。）もちろん、最初の眼はそれほどよく世界を捉えていたわけではないだろう。しかし、たとえばはっきり見えていなくとも、見るものの目の前には見られるものがいたはずだ。見られる生きものは、見られていることに気がつかないかもしれないが、それがどんなふうに見られているかには確実に意味が生まれた。徐々に目をもつ生物が世界を席卷し、見る、見られる関係を通じて世界が変わっていく……。光スイッチは生物進化を促進するととてもなく影響力の大きなスイッチであり、「生物圏の晴れ上がり」を招いたと言ってもいいだろう。この本はとても刺激的で、研究者の好奇心がサイエンスを進めていく原点であることを描く好例でもある。冬の長い夜には、私たちが眼をもち、美しい惑星を見ることができると感謝する時間をもってはどうだろうか。

ダグラス・アダムス著 『銀河ヒッチハイク・ガイド』（河出文庫）

さて、この美しい惑星を惜しげもなくブツとばして見せたのはダグラス・アダムスの、はちゃめちゃSF小説。美しいナントカとか、愛国心がどうか言ってるおじさん、ついでに世界基準がどうか言ってるダバディ君、ちょっとダグラス・アダムス読んでみて（読むわけないか）。昨年から今年にかけて5冊が文庫で一気に出版された。そのシリーズの最初の1冊。読み出して40ページくらいで地球は、主人公のアーサー・デントの家と同じくバイパス道路建設のために取り壊される運命をたどる。次々に繰り出される荒唐無稽なアイデアやパロディの、全部を理解できているわけではおそくないのだろうけど、とにかく

く腹を抱えているうちに、地球も人間もうんと相対化されているはず。ちょっと疲れているときには、これでハイな気分になりたい。昨年映画化もされてます。

ジャレド・ダイヤモンド著 『文明崩壊（上・下）』（草思社）

美しい惑星を惜しげもなくブツとばしているのは、私であり、あなたである人間だ。グーグル・アースでカリブ海はイスパニョーラ島を見してみる。ドミニカ共和国とハイチの国境線に沿ってズームアップしてみる。本書でダイヤモンドが描くとおり、同じ島でありながら、もともとそれほど変わりのない自然環境でありながら、国境によって確かに緑の被覆量が違っていることが見てとれる。さすがにグーグル・アースは凄いが、どうしてそんな違いが生じてしまったのかまでは説明してくれない。ダイヤモンドの説明を読めば、一筋縄ではいかないことがわかるだろう。どんな文明、どんな社会がどんな自然環境と折り合いをつけて持続できたか、あるいは自然環境を食いつぶして崩壊したか。ダイヤモンドは、文化決定論に陥るでもなく、環境決定論に陥るでもなく、分析を進めている。悲観論には走らない。ダイヤモンドの「慎重な楽観論」から、とても誠実な気持ちが伝わってくる。新しい年を迎える準備として、一読を薦めたい。

<研究室から>

香への誘い

金沢 謙太郎 環境・バイオサイエンス学科助教授

今年2月の初め、図書館において「源氏香」という香席が設けられた。本館閲覧室の展示、「源氏物語の世界」に関連した催しで、図書館員（当時）の井出敦子さんが企画されたものだった。当日は、数名の方々と一緒に源氏物語を題材にして香木の香りを聞き当てる一種のゲームを楽しませていただいた。

私の研究関心の一つは、実はその香席で使われている沈香と呼ばれる香木にある。沈香は、東南アジアの熱帯雨林においてジンチョウゲ科ジンコウ属の材からとれる樹脂のことである。その樹脂に火をつけ、燻すことによって、幽玄な香りが生まれる。

沈香は長年にわたり交易の対象となってきた。主に、中近東などのイスラム圏や中国などの仏教圏に輸出され、香を焚いて清めるという宗教行事の小道具として使われてきた。日本の中世では、茶道、華道と並んで香道という伝統文化が生まれている。

大阪や京都の商人は足利氏の末葉から沈香を求めて海を渡った。香港はかつて、文字通り香木を商う港として栄えていた。沈香はいくつかの等級に分けられるが、最上級品ともなると、今や1グラム2万円以上で販売されている。純金やプラチナよりも数倍高いから驚きである。

ところが、沈香の生態的情報についてはほとんど明らかになっていない。森の奥深くに存在するためである。私はこの10年ほど、ボルネオ島のサラワクというところに通って、狩猟採集民の生活を調べている。そこで、数年前に初めて彼らの沈香採りに同行してみた。

沈香採りの旅は、道なき道を何時間も歩き回り、私の場合、擦り傷、切り傷、つま先の打撲などが絶えなかった。また、無数の蚊やハチ、ヒル、トゲ植物などとも闘わねばならない。途中、数え切れないほどのヒルを靴の中からつまみ出した。しかし、狩猟採集民はどんな場所も裸足で平気である。ヒルに刺されてもほとんど気にしない。

同行してわかったことは、ジンコウ木の生息密度はかなり低いということ、すべてのジンコウ木に樹脂成分が存在するわけではないこと、狩猟採集民は落葉や樹皮からジンコウ木を認識していること、などである。

その後、沈香の流過程に関心が広がり、目下、アジアを産地から消費地まで追いかけている。先日、本学図書館にて杉本文太郎著『香道』という本を手にした。「沈香の渡来」という章が参考になった。同書には、昭和 13 年 6 月 30 日の納本印が押され、定価は 4 円とあった。図書館という知的財産に大いに感謝したい。

＜煌きの軌跡をたどる ― 大澤壽人遺作コレクション ―＞

生島 美紀子 音楽学部非常勤講師

「こちらどうぞ」と案内された部屋に入ったとたん、息を呑んだ。目をやった先には自筆譜の山。ラック上方まで積まれている。筒状になって置かれた演奏会用ポスターも数え切れず。下方にはアルバムやプログラム。写真の主はダンディで、映画スターのような面持ちである。紙袋の中には折り重なった書簡。留学先から送ったものか。そして何よりも、壁際の床に直接置かれた総譜。重さで傾いているが、一番上には「ヴァイオリン協奏曲」の表紙が見え、他の大作と共に眠っていたのがわかる。戦争をはさんで七十年の眠りである。

作曲家大澤壽人（おおさわ・ひさと、1907-53年）は西宮市大谷町に暮らし、ボストン・パリをめぐる人生を駆け抜けた。作曲活動、演奏活動、神戸女学院での教育という多忙な日々の拠点であった地に、現在は長男壽文氏ご夫妻がお住まいである。ご遺族より学院へ遺品資料のご寄贈があり、八月に浜下先生、図書館水野課長、史料室佐伯さん、富岡さんと訪問。コレクションの質と量にまさに圧倒された。

大澤先生は昭和十年～二十年代、音楽学部に奉職された。脳溢血で突然世を去られたときは四十六歳で、現役の教授であった。関西学院を卒業後直ちにアメリカへ留学、三年後にはボストン交響楽団を初の日本人として指揮、自作を披露。世界の楽壇の中心であったパリに渡って認められるなど、輝かしい才能は当時の日本人の枠を遥かに超えていた。帰国後は東京からも引き合いがあったというが、女学院を選ばれ、学院を愛し、生徒を愛して、教育に携わって下さった。ご遺族が寄贈先に女学院を考えられたのもそのような理由である。

お若くして亡くなられたこと、また戦争の時期であったこと等が重なり、先生には長い間正しい評価が伴わず、学院の私達も業績の偉大さを知らずして過ごしてきた。そのためかご遺族の意向もすんなりと通った訳ではない。この春、直接の教え子である岡田晴美名誉教授（音楽学部同窓会クラブ・ファンタジー会長）が愛情と熱意にあふれる要望書を学院宛に書かれた際、コレクションの音楽的・学術的価値について推薦状を書かせて頂き、受け入れは実現した。

コレクションの中でも、自筆譜には目を見張るものがある。大作のインク浄書からラジオ放送用の鉛筆書き総譜まで、先生の淀みない筆致は美しい。躍動する音符の間に楽想が溢れ、定着の速さが透けて見え、膨大な量の仕事をこなされたとは信じられないほどであ

る。自筆譜整理と作品カタログ作成は、音楽学部出身者を中心に行われるが、譜を間近に拝見し、作曲家の息遣いを感じるような経験は、作業に携わる多くの者にとって何にも代えがたいと思う。

今年は音楽学部創設百周年、来年は先生の生誕百周年。この節目の時期に「大澤壽人、岡田山にあり」と発信していきなさい、大澤研究のセンターとして女学院の名を知らしめなさい、と先生が学院に力を貸して下さっているような気がする。先生の輝かしい音楽人生、その煌きの軌跡をたどる作業はこれから始まる。

<史料室から 一史料室はジュリア・ダッドレー館で展示をしていますー >

佐伯 裕加恵 史料室職員

史料室は、神戸女学院の歴史資料を取り扱っている図書館の中にある一部署です。しかし、近年、歴史文書の取り扱いだけでなく、学校の歴史や精神を学校の内外に伝えるという大切な役割を担うようになってきました。

その1つが展示です。文書類と展示、なんとなくそぐわない感じがしないでもありません。しかし、歴史文書を取り扱っているということは、学校の歴史や精神をよく理解することができるということで、目に見えないもの（歴史や精神）を目に見える形にすること（展示）ができると考えられているのです。

史料室では年に3回ほどの展示を行なっています。展示場所はジュリア・ダッドレー館入口を入った正面にある展示ケースです。今年度からケース内の照明が明るくなったので、目に付きやすくなったのではないかと思います。展示内容はおおむね半年単位で変えています。常設展と企画展の組み合わせでしていますが、2006年度は年間を通じて企画展を行なっています。

前期は、没後100周年となる創立者ダッドレー先生の展示を行ないました。後期は、今年創設100周年を迎えた音楽学部を紹介する展示を行なっています。（毎年12月にはクリスマス展示をしています。）展示目録を置いていますので、展示とあわせてご覧ください。

史料室の行なう展示は歴史展示ですから、博物館や美術館のように人目を引くものが必ずしもあるわけではありませんが、史料や物を通して「神戸女学院とはどういう学校なのか」を皆さんに知ってもらえる機会になればと願っています。

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (6)>

作中人物への鍵—その2 (『コニングズビー』に関して) >

松村 昌家 大手前大学大学院教授

政治思想の表現の面からみても、文学的・歴史的な興味の面から言っても、ディズレイリの全作品のなかで筆頭にあげられるべきは、『コニングズビー、または新世代』(Coningsby or the New Generation、1844)であろう。

『コニングズビー』は、ロバート・ブレイクやレイ・カザミアンが指摘しているように、イギリス最初の政治小説であり、ディズレイリは、この作品によって、政治小説の創始者として、また政治小説の代表的作家としての評価を得ているのである。

当然登場人物の原型について、大いに興味がわくばかりでなく、この作品の性質からいっても、少なくとも主要人物についてアイデンティティを突きとめるのは、必要なことでもあるのだ。

しかしそのためには、まずこの小説の内容を紹介しておく必要があるだろう。



『Coningsby』の翻訳本『春鶯囀』明治17年刊



「コニングズビー、ミルバンクを救う」 ミルバンク

14歳の孤児ハリー・コニングズビー少年が、彼の幼年時代からの教育係をつとめているラグビーによって、祖父のモンマス侯と初対面する場面から物語は始まる。コニングズビーの父親は、その父モンマス侯の強い反対を押し切って貧しい牧師の娘と結婚したために、絶縁を言い渡されていた。

その両親を失ったコニングズビーは祖父の保護のもとで、イートン校での学業をつづけることになる。その学校生活のなかで、天才型のコニングズビーが、努力型の典型としてライバル関係にあったオズワルド・ミルバンクを溺死の危機から救出したのが動機となって、二人は終生の友情の絆で結ばれる。

のちにコニングズビーは、ミルバンクの妹イーディスと相愛の仲となり、曲折を経てめでたく結ばれることになる。この結合は、単に旧貴族と新興の富との結合を象徴するだけでなく、ディズレイリの青年イングランド派の理想をも象徴しているといえるだろう。

イートン校での課程を終えてケンブリッジ大学に進学したコニングズビーは、在学中に彼の人生に決定的な影響を及ぼすことになる一人の人物とめぐり合う。ユダヤ人の血を引くシドーニアである。

旅の途中、嵐を避けて入りこんだ森の宿屋で初対面して以来、シドーニアは謎の多い、そして不思議な力を備えた人物として、コニングズビーの人生航路の要所要所に姿を現す。シドーニアから「若さ」の哲学を教え込まれ、新保守理想主義を鼓舞されたコニングズビーは、旧保守主義の権化のような祖父に呼ばれ、ダールフォード選挙区から立候補してミルバンク（オズワルドの父）と対決し、彼を敗北に追い込むように命じられるが、己の信念を主張して激しく対立する。

このあたりには、『コニングズビー』の副題にいう「新世代」が、特権意識で淀みきった守旧勢力に立ち向かうところが描かれていて、編中の白眉をなす。

この一件に加えて、コニングズビーがモンマス侯の仇敵であるミルバンクの娘と恋仲になっていることなどが露見して、彼はますます祖父の逆鱗にふれることになる。

ほどなくモンマス侯は急死、遺書は書き換えられていて、コニングズビーが相続するはずだった莫大な遺産は、侯がかってある女優に産ませた私生児フローラに贈るように指示されていた。コニングズビーは絶望するが、「物はすべて他との関係において見よ」(View everything in its relation to the rest.)というシドーニアの教えに勇気づけられて、法律の勉強を志し、テンプル法学院の書生として新しい人生に向かって第一歩を踏み出す。

やがて 1841 年にホイッグ内閣が崩壊、総選挙となった。ダールフォードで絶対優勢と見られていたミルバンクが引退を表明、代わりにコニングズビーを推薦する立場をとる。その結果コニングズビーは、同じトーリー党から出馬したリグビーと一騎打ちの選挙戦を戦うことになる。

ミルバンクの強力な支援を得てコニングズビーは快勝、初の国会入りを果たす。と同時にイーディスともめでたく結ばれる。そして最後には、フローラが死んで、モンマス侯から受け継いだ全財産がコニングズビーに贈られるというおまけ付で物語は幕を閉じる。

以上のあらすじでもわかるように、『コニングズビー』は、1832 年の第一次選挙法改正直前から 1841 年の総選挙におけるトーリー党の勝利に至るまでの政治的流れを中軸にして組立てられた政治小説である。政治小説は、同時代性をもって、その特徴とする。作中人物についての謎解きの問題が起こり、それに好奇心と関心が向けられるのもそのためである。

では『コニングズビー』の主人公のモデルになったのは誰で、どういう人物だったのだ。今回は、ディズレイリが結成した青年イングランド派の面々とも絡めて、この問題を解く鍵を紹介するとともに、作中の他の主要な人物たちの原型を探ってみることにする。

<図書館からのお知らせ>

グループ

●『グループ閲覧室』オープンのお知らせ

図書館新館4階元マイクロリーダー室を改装して『グループ閲覧室』を設け、11月20日より利用を開始いたしました。この部屋は、教職員、学部生や院生が3～約12名で図書館資料を使ってグループ研究をするための場所です。これまでの閲覧室ではできなかった打ち合わせ、討論、発表などをパソコンを持ち込んですることができます。詳しい利用方法は1階カウンターでお尋ね下さい。

●クリスマス特別展示ー『聖書の世界』ー

図書館本館閲覧室では、クリスマス特別展示ー『聖書の世界』ーと題して、「三大ケルト装飾写本」と称されるものの中から、「ケルズの書」と「リンディスファーン福音書」、そして世界初の活版印刷物である「グーテンベルク聖書」を、12月22日まで展示しております。いずれも複製版ですが、緻密で美しい装飾を、十分に愉しんでいただけたと思いますので、この機会にぜひご覧下さい。



リンディスファーン福音書